

私の好きなことば (117)

茨城県近代美術館 館長

尾崎 正明



画室で製作するのは丁度密教で密室に於いて
秘法を修し加持護念するのと同じ事だと思
っています。
(村上華岳)

村上華岳は、大正期から昭和期にかけて活躍した日本画家である、この一文は彼が大正九年に書き残した文章の一部で、「画論」という文集に掲載されている。人間が生きている目的は世界の本体を掴み、宇宙の真諦に達することにあるともいつており、深い精神性を秘めたその作品は近代の文人画とさえ評される。もともと、当時は土田麦僊、小野竹喬らと起こした国画創作協会の運営に繁忙を極め、とてもそうした信念を全うする情況にはなかったと思われる。華岳がその言葉通りの画生活を送るようになるのは、やはり神戸の花隈に隠棲し画壇と距離を置くようになってからであろう。六甲の山々を歩き、ひたすら風の音を聞き、雲の流れを見つめることから生まれた数々の仏画や山水は、画であることを越えて生きることの意味そのものを鋭く問うてくるようである。最も好きな画家の一人であるが、浄化された孤高の精神と向き合う時、いつも心洗われる気持ちになるのを覚える。